

## 小学校高学年における愛着対象に関する検討 —ソーシャルサポートとコンボイ・モデルの観点から—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 八越 忍

立正大学心理学部 永井 智

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 濱口 佳和

Attachment figures among elementary school children: An investigation of social support and the function of convoys

Shinobu Yakoshi (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Satoru Nagai (*Faculty of Psychology, Rissho University, Shinagawa 141-8602, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of the present study was to investigate attachment figures among elementary school children from the perspective of social support and the convoy model. Elementary-school children ( $N=668$ ) completed a questionnaire measuring social support from their mother and a same sex close friend and the function of convoys. The results concerning social support suggest that the mother is an important person who offers social support to children. The results also suggest that there may be some gender differences between the quality of the mother-child relationships and the quality of friend relationships. The results concerning convoys suggest that the primary attachment figure may transfer from mother to another person and the function of friends may become more important as children become older.

**Key words:** attachment figures, elementary school children, social support, convoy model

### 問題と目的

愛着とは、危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め、また、これを維持しようとする個体の傾性である (Bowlby, 1969)。より広義には、絆、すなわち人が特定の対象との間に築く緊密な情緒的結びつきと定義される。愛着理論の中で、これまで多くの関心を引いてきたのは内的作業モデルという概念である (坂上, 2005)。内的作業モデルとは、愛着対象との間で交わされた過去の相互作用経験、ならびにそのときその場で起こっている相互作用に基づいて作ら

れる、自分の周りの世界や愛着対象、そして自己に関する心的な表象モデルである。個人は、内在化された内的作業モデルを基礎に、対人的出来事を知覚、解釈し、未来の予測を立て、行動のプランニングを行っていきとされている。

これまでの国内の研究を概観すると、乳幼児期と青年期以降の愛着を測定し、検討した研究は多く見られる (例えば、数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000; 中尾・加藤, 2004; 詫摩・戸田, 1988; 山岸, 1997)。しかし、6歳以降から青年期まで、小学生を対象とした研究 (本多, 2002; 本多・桜井, 2002) や中学生を対象とした研究 (粕谷・河村,

2005; 久保田, 1995) が報告されているものの, 実証的研究は数少ない。

Bowlby (1988) は, 内的作業モデルは生涯にわたって連続性を有しやすいことを指摘する一方で, 内的作業モデルの更新機能をも仮定していた。発達過程における内的作業モデルの変容が生じる時期や要因についての研究も行われており (遠藤, 1992), 山岸 (1997), 嶋田・田中 (2005) は, ライフイベントが内的作業モデルを変容させる可能性を示唆している。児童期の愛着研究を行うことにより, 児童期以前, 以降との愛着の連続性, 内的作業モデルの変容について検討することが可能になると考えられる。内的作業モデルの変容可能性を仮定し, その過程や要因を明らかにするためにも, 縦断的な研究が求められる。数井 (2007) によると, 小学校高学年に近づくにつれ, 愛着の問題が, 子ども自身の心理的, 適応的な問題となって現れてくるという。したがって, 児童期の愛着研究を行うことは, さまざまな問題への対応や援助, 介入の視点につながる点でも意義があると考えられる。

ところで, 児童期において愛着研究を行う際には, 子どもの対人関係に依じた最も重要な愛着対象を明らかにし, 考慮に入れる必要がある (園田・北村・遠藤, 2005)。Furman & Buhrmester (1985) は, 5年生と6年生を対象として, 児童がまわりの人との関係をどのようにとらえているかを調査し, 児童が人による関係の違いを認めていることを示している。また, Hartup (1989) は, 発達とともにまわりの人との関係が異なってくることを示唆している。Sullivan (1953) による対人関係の発達の理論によれば, 児童期には仲間から受け入れられることがその中心的課題である。児童期中期頃までには, きわめて親密な関係を友だちとの間にも築き得ようになる (Rubin, Bukowski & Parker, 1998)。実際, 親密な友だちを持つ子どもは, そうでない子どもよりも, 孤独を感じにくいことが示されている (Parker & Asher, 1993)。井上・高橋 (2000) は, 小学校3年生と6年生を対象として, 誰に最も愛情要求が向けられているかにより対人関係の類型化を行った。その結果, 友だちが優勢な友だち型は50.4%, 母親が優勢な母親型は11.5%であった。佐藤 (1993) は, 中学生, 高校生, 大学生を対象として, 年齢が上がるにつれて, 親への愛着の持つ影響力が小さくなることを示している。児童期後期から青年期にかけて, 次第に友だちが親よりも重要な他者となっていくといわれている (清水, 2009)。児童期は学校生活や友だち集団の中で子どもの世界が飛躍的に広がる時期であることから, 児童期には母親だけでなく友

だちをはじめとした他者も徐々に重要な愛着対象となってくると考えられる。

以上より, 本研究では, 児童期の愛着対象を把握することを目的とする。近年, 愛着理論とソーシャルサポート研究を結合させる必要があるといわれている (Asendorpf & Wilpers, 2000)。そこで本研究では, ソーシャルサポートとコンボイ・モデルに着目する。ソーシャルサポート研究における理論的基盤のひとつとして愛着理論が挙げられる (久田, 1987)。コンボイ・モデルも愛着理論に基づいており, 個人のコンボイは, 個人の人生において身近で重要であると知覚された関係であると定義される (Kahn & Antonucci, 1980)。愛着対象の移行期と考えられる小学校高学年を対象として, 重要な愛着対象と想定される母親, 友だちをサポート源とするソーシャルサポートとコンボイ・メンバーの構造や機能の発達の異なる変化を検討する。

## 方 法

### 調査対象者

茨城県内の公立小学校3校の4～6年生804名(男子414名, 女子389名, 不明1名)に対して調査を行った。

### 調査時期

2008年11月および2009年10月～2010年3月に実施した。

### 調査内容

①友だちをサポート源とするソーシャルサポート 森・堀野 (1992) が作成した児童用ソーシャルサポート尺度を用いた。サポート源として, 「いちばん仲のよい同性の友だち」を設定し, 項目に示された援助をどの程度してくれそうかを回答させた。回答の方法は, それぞれの項目に対して「きつとそうだ (4点)」, 「たぶんそうだ (3点)」, 「たぶんちがう (2点)」, 「絶対ちがう (1点)」のいずれかを選択する4件法であった。項目平均値を算出し, それを尺度得点とした。

②児童の主要養育者に関する項目 主要養育者を尋ねる項目 (あなたの世話をいちばんよくしてくれる人は誰か) に対して, 父親, 母親, 祖父, 祖母, おじ, おば, きょうだい, その他の中からあてはまる人1人を選択させた。

③主要養育者をサポート源とするソーシャルサポート 森・堀野 (1992) が作成した児童用ソーシャ

ルサポート尺度を用いた。サポート源として、主要養育者に関する項目で選択した「世話をいちばんよくしてくれる人」を設定し、項目に示された援助をその程度してくれそうかを回答させた。回答の方法は、それぞれの項目に対して「きつとそうだ(4点)」、「たぶんそうだ(3点)」、「たぶんちがう(2点)」、「絶対ちがう(1点)」のいずれかを選択する4件法であった。項目平均値を算出し、それを尺度得点とした。

④コンボイ・メンバーに関する項目 コンボイ面接の手続き (Levitt, Guacci-Franco & Levitt, 1993) を参考にして、親しく重要な人を尋ねる項目1項目、サポート機能を果たす人を尋ねる項目6項目を作成した。それぞれの項目に対して、父親、母親、きょうだい、友だち、先生、いとこ、誰でもいい、わからない、その他の中からあてはまる人1人を選択させた。

2008年11月に実施した調査、2009年10月～2010年3月に実施した調査、いずれの調査対象者にも①、②、③、④への回答を求めた。また、これらの他の尺度も同時に実施されたが、本研究の分析には用いられなかった。

#### 調査手続き

調査は各学級担任に依頼し、学級ごとに集団で個別記入式の質問紙調査を実施した。調査実施前に児童に対して、テストではないので、正しい答えや間違った答えはないこと、本人の回答は調査以外では使用されず、誰にも知られないことを説明することを依頼した。質問紙のフェイスシートにも、回答の秘密は守られること、成績にはまったく関係がないことを明記し、無記名式で回答を求めた。

#### 結果と考察

記入に不備のない668名(男子340名、女子328名)の回答を対象に分析を行った。内訳は4年生215名(男子101名、女子114名)、5年生242名(男

子128名、女子114名)、6年生211名(男子111名、女子100名)であった。ソーシャルサポート得点に関しては、記入に不備がなく、主要養育者として母親のみを選択した495名(男子240名、女子255名)の回答を対象に分析を行った。内訳は4年生154名(男子65名、女子89名)、5年生170名(男子87名、女子83名)、6年生171名(男子88名、女子83名)であった。

#### ソーシャルサポート

各サポート源についてソーシャルサポート得点の学年差と性差を検討するために、(学年)×(性)の2要因の分散分析を行った(Table 1)。その結果、母親をサポート源とするソーシャルサポート得点については群間に有意な差は見られなかった。友だちをサポート源とするソーシャルサポート得点については、学年の主効果が有意傾向であり( $F(2,489) = 2.61, p < .10$ )、性の主効果が有意であった( $F(1,489) = 18.39, p < .01$ )。多重比較によると、6年生よりも4年生のほうが得点が高かった。また、男子よりも女子のほうが得点が高かった。友だちをサポート源とするソーシャルサポート得点については交互作用が有意傾向であった( $F(2,489) = 2.34, p < .10$ )ため、単純主効果の検定を行った。その結果、女子において学年の単純主効果が有意傾向であり( $F(2,489) = 3.00, p < .10$ )、6年生に比べて4年生、5年生のほうが得点が高かった。また、4年生( $F(1,489) = 4.57, p < .05$ )と5年生( $F(1,489) = 17.38, p < .01$ )において性の単純主効果が有意であった。4年生、5年生ともに男子よりも女子のほうが得点が高かった。

母親をサポート源とするソーシャルサポート得点と友だちをサポート源とするソーシャルサポート得点との差を検討するために、男女別にt検定を行った。その結果、男子においては有意な差が見られ( $t(239) = 3.05, p < .01$ )、母親をサポート源とするソーシャルサポート得点のほうが高かった。女子においては有意な差は見られなかった。

Table 1 ソーシャルサポート得点の平均値と分散分析結果

	4年生		5年生		6年生		F値		交互作用
	男子 n=65	女子 n=89	男子 n=87	女子 n=83	男子 n=88	女子 n=83	主効果 学年	性	
母親	3.36 (0.54)	3.58 (0.43)	3.39 (0.58)	3.42 (0.57)	3.35 (0.57)	3.34 (0.59)	2.12 n.s.	2.45 n.s.	1.91 n.s.
友だち	3.34 (0.58)	3.53 (0.47)	3.16 (0.67)	3.52 (0.42)	3.25 (0.60)	3.34 (0.56)	2.61 †	18.39 **	2.34 †

( ) 内は標準偏差。 \*\*  $p < .01$ , †  $p < .10$

児童を対象としたソーシャルサポートの研究(森・堀野, 1992)では, 母親, 友だちのソーシャルサポートに性差が認められている。Slavin & Rainer (1990)は, 14歳から18歳を対象として, 家族からのソーシャルサポートの重要性には性差が認められないが, 家族以外の大人および仲間のソーシャルサポートの重要性は女子のほうが高いことを示している。本研究で得られた, 友だちのソーシャルサポートにおける性差はこれらの結果と一致するものである。また, Furman & Buhrmester (1985)は, 児童は父母との関係を最も重要と考えていることを報告している。本研究では, 母親のソーシャルサポートについて性差が見られなかった。したがって, 小学校高学年の児童にとって母親は男女ともに重要なサポート源であると考えられる。さらに, 男子においては友だちのソーシャルサポートよりも母親のソーシャルサポートのほうが高く認知されていたが, 女子においては差が見られなかったことから, 男女で母親, 友だちとの関係の質が異なっていることが考えられる。

#### コンボイ・モデル

「親しく重要な人」として選択された人物について, 学年別の出現度数を Table 2 に示した。 $\chi^2$  検定を行った結果, 人数比率の偏りが有意であった ( $\chi^2(14) = 45.16, p < .01$ )。残差分析の結果, 4年生において母親が多く (3.5), 「わからない」が少なかった (-4.0)。6年生において母親 (-3.7) といとこ (-2.0) が少なく, 「誰でもいい」(2.0) と「わからない」(4.5) が多かった。

コンボイ・モデルを用いた研究 (Asendorpf & Wilpers, 2000) では, 愛着とサポートとの間に強い関連があることが示されており, コンボイ・モデルにおいて最も親しく重要な人の心理的機能は, 愛着の対象に等しいと考えられている。本研究の結果か

ら, 学年が上がるにつれ, 主たる愛着対象が母親から別の対象へと移行する可能性が考えられる。6年生において「誰でもいい」や「わからない」を選択する児童が多かった理由のひとつとして, 思春期の心的状態 (加藤, 1984) が考えられる。

サポート機能に関しては, 「誰でもいい」, 「わからない」, 「その他」を分析から除外し, 父親, 母親, きょうだい, 友だち, 先生, いとこに注目して検討を行った。各サポート機能を果たす人として選択された人物について, 父親, 母親, きょうだい, 友だち, 先生, いとこの出現度数を Table 3 に示した。さらに, 学年別に出現度数を求め,  $\chi^2$  検定を行った結果, 気持ちを楽にしてくれる人 ( $\chi^2(10) = 24.00, p < .01$ ), 一緒にいたい, 一緒に楽しいことをしたい人 ( $\chi^2(10) = 27.13, p < .01$ ), 自信を持たせてくれる人 ( $\chi^2(10) = 21.53, p < .05$ ) の項目において人数比率の偏りが有意であった。宿題や課題を手伝ってくれる人の項目においては人数比率の偏りが有意傾向であった ( $\chi^2(10) = 18.25, p < .10$ )。以上4つのサポート機能を果たす人として選択された人物の学年別の出現度数を Table 4, Table 5, Table 6, Table 7 に示した。残差分析の結果, 気持ちを楽にしてくれる人については, 6年生において友だちが多かった (3.4)。宿題や課題を手伝ってくれる人については, 4年生において母親が多く (2.4), 6年生において母親が少なく (-2.6), 友だちが多かった (2.5)。一緒にいたい, 一緒に楽しいことをしたい人については, 4年生において友だちが少なく (-2.7), 6年生において父親 (-2.4) といとこ (-2.4) が少なく, 友だちが多かった (4.6)。自信を持たせてくれる人については, 4年生において母親が多く (2.6), 5年生において父親が多く (2.0), 6年生において友だちが多かった (2.6)。

「親しく重要な人」と5つのサポート機能の項目において母親が最も多く選択されていた。「一緒に

Table 2 「親しく重要な人」として選択された人物の出現度数

	4年生	5年生	6年生	合計
父親	29 (13.5%)	29 (12.0%)	18 (8.5%)	76
母親	116 (54.0%)	108 (44.6%)	71 (33.6%)	295
きょうだい	14 (6.5%)	14 (5.8%)	10 (4.7%)	38
友だち	19 (8.8%)	24 (9.9%)	29 (13.7%)	72
いとこ	6 (2.8%)	7 (2.9%)	1 (0.5%)	14
誰でもいい	8 (3.7%)	13 (5.4%)	18 (8.5%)	39
わからない	19 (8.8%)	40 (16.5%)	57 (27.0%)	116
その他	4 (1.9%)	7 (2.9%)	7 (3.3%)	18
合計	215	242	211	668

$\chi^2(14) = 45.16, p < .01$ .

Table 3 サポート機能を果たす人として選択された人物の出現度数

	話す	気持ち	世話	宿題	一緒	自信
父親	60 (9.0%)	76 (11.4%)	15 (2.2%)	123 (18.4%)	74 (11.1%)	110 (16.5%)
母親	330 (49.4%)	218 (32.6%)	577 (86.4%)	272 (40.7%)	111 (16.6%)	242 (36.2%)
きょうだい	37 (5.5%)	54 (8.1%)	8 (1.2%)	92 (13.8%)	74 (11.1%)	27 (4.0%)
友だち	120 (18.0%)	185 (27.7%)	4 (0.6%)	57 (8.5%)	295 (44.2%)	143 (21.4%)
先生	5 (0.7%)	14 (2.1%)	4 (0.6%)	6 (0.9%)	1 (0.1%)	30 (4.5%)
いとこ	7 (1.0%)	16 (2.4%)	1 (0.1%)	5 (0.7%)	39 (5.8%)	7 (1.0%)
	559	563	609	555	594	559

「話す」：自分にとって大切なことを話す人

「気持ち」：困惑したときや自信がないときに気持ちを楽にしてくれる人

「世話」：病気のとき世話をしてくれる人

「宿題」：学校の宿題や課題を手伝ってくれる人

「一緒」：一緒にいたい、一緒に楽しいことをしたい人

「自信」：自信を持たせてくれる人

Table 4 「困惑したときや自信がないときに気持ちを楽にしてくれる人」として選択された人物の出現度数

	4年生	5年生	6年生	合計
父親	33 (16.7%)	28 (13.5%)	15 (9.5%)	76
母親	77 (38.9%)	85 (41.1%)	56 (35.4%)	218
きょうだい	23 (11.6%)	17 (8.2%)	14 (8.9%)	54
友だち	56 (28.3%)	60 (29.0%)	69 (43.7%)	185
先生	7 (3.5%)	7 (3.4%)	0 (0.0%)	14
いとこ	2 (1.0%)	10 (4.8%)	4 (2.5%)	16
合計	198	207	158	563

$\chi^2(10) = 24.00, p < .01.$

Table 5 「学校の宿題や課題を手伝ってくれる人」として選択された人物の出現度数

	4年生	5年生	6年生	合計
父親	38 (20.5%)	52 (25.4%)	33 (20.0%)	123
母親	104 (56.2%)	101 (49.3%)	67 (40.6%)	272
きょうだい	25 (13.5%)	32 (15.6%)	35 (21.2%)	92
友だち	14 (7.6%)	18 (8.8%)	25 (15.2%)	57
先生	2 (1.1%)	2 (1.0%)	2 (1.2%)	6
いとこ	2 (1.1%)	0 (0.0%)	3 (1.8%)	5
合計	185	205	165	555

$\chi^2(10) = 18.25, p < .10.$

いたい、一緒に楽しいことをしたい人」の項目において友だちが最も多く選択され、3つのサポート機能の項目において、友だちは母親に次いで2番目に多く選択されていた。さらに、4つのサポート機能の項目で6年生において友だちが多く選択されていることが示された。

Levitt, Bustos, Crooks, Hodgetts, Milevsky & Levitt (2002) は、子どものコンボイの最も内側の円の中のメンバーの構成について2つの時点で検討し、第1時点では4年生と6年生において母親、父親、きょうだいの順に多く挙げられること、第1時点の2年後の第2時点では友だちを選択する子ども

Table 6 「一緒にいたい, 一緒に楽しいことをしたい人」として選択された人物の出現度数

	4年生	5年生	6年生	合計
父親	31 (15.4%)	30 (13.8%)	13 (7.4%)	74
母親	41 (20.4%)	44 (20.3%)	26 (14.8%)	111
きょうだい	28 (13.9%)	28 (12.9%)	18 (10.2%)	74
友だち	84 (41.8%)	98 (45.2%)	113 (64.2%)	295
先生	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (0.6%)	1
いここ	17 (8.5%)	17 (7.8%)	5 (2.8%)	39
合計	201	217	176	594

$$\chi^2(10) = 27.13, p < .01.$$

Table 7 「自信を持たせてくれる人」として選択された人物の出現度数

	4年生	5年生	6年生	合計
父親	35 (17.9%)	50 (24.2%)	25 (15.9%)	110
母親	99 (50.8%)	80 (38.6%)	63 (40.1%)	242
きょうだい	7 (3.6%)	11 (5.3%)	9 (5.7%)	27
友だち	46 (23.6%)	45 (21.7%)	52 (33.1%)	143
先生	8 (4.1%)	16 (7.7%)	6 (3.8%)	30
いここ	0 (0.0%)	5 (2.4%)	2 (1.3%)	7
合計	195	207	157	559

$$\chi^2(10) = 21.53, p < .05.$$

の数が2倍になることを示している。また, Levitt et al. (1993) は, 児童期中期に拡大家族のサポートが増加し, 青年期に友だちのサポートが増加することを明らかにしている。児童期中期から青年期への移行をとりあげ, 移行の前後におけるコンボイの変化を検討した研究 (Levitt, 2001) も見られる。友だちは, 活動時間の大部分を共有する仲間として援助期待が高いといわれている。コンボイのサポート機能に関する結果から, 小学校高学年の児童において, 次第に友だちの果たす役割が大きくなっていくと考えられる。

#### まとめと今後の課題

本研究では, 小学校高学年における愛着対象について, ソーシャルサポートとコンボイ・モデルの観点から検討することを目的とした。

ソーシャルサポートについては, 先行研究 (森・堀野, 1992) の結果と同様に, 小学校高学年の児童にとって母親が重要なサポート源であることが示された。母親をサポート源とするソーシャルサポート得点と友だちをサポート源とするソーシャルサポート得点の比較から, 男女で母親, 友だちとの関係の質が異なっていることが考えられた。

コンボイ・メンバーについては, 「親しく重要な人」と6つのサポート機能を果たす対象に注目して検討を行った。その結果, 小学校高学年の児童において, 学年が上がるにつれ, 主たる愛着対象が母親から別の対象へと移行する可能性, 友だちの果たす役割が大きくなっていくことが考えられた。

以上より, 小学校高学年における重要な愛着対象は母親であると考えられる。学年が上がるにつれ, 母親, 友だちそれぞれの果たす機能が変化し, それに伴って主たる愛着対象が母親から移行していくと考えられる。

本研究の限界と課題を2点述べる。第1に, 小学校高学年における愛着対象の移行について1時点の調査から得られた結果に基づき考察を行った。今後縦断的な研究によって, 児童期中期から青年期にかけてどのような変化が生じているのか検討される必要がある。第2に, 本研究ではコンボイの最も親しく重要な人の心理的機能を, 愛着の対象に等しいとみなした。愛着行動は, 「近接性の維持」, 「安全な隠れ家」, 「分離抵抗」, 「安全基地」の4つの観点からとらえることができる (Bowlby, 1969)。愛着対象の移行について, Hazan & Zeifman (1994) は, 児童期中期以降, 親を安全基地としながら, 愛着の

機能が順次移行していくことを示唆している。したがって、今後は愛着対象について愛着の機能の観点から詳細に検討していく必要があると考えられる(村上, 2010; 村上・櫻井, 2010)。

## 謝 辞

調査にご協力くださいました小学校の先生方、児童の皆様は深く感謝申し上げます。また、本論文を作成するにあたり、ご指導くださいました筑波大学大学院人間総合科学研究科教授(現東京成徳大学大学院心理学研究科教授)新井邦二郎先生に厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

- Asendorpf, J.B. & Wilpers, S. (2000). Attachment security and available support: Closely linked relationship qualities. *Journal of Social and Personal Relationships*, *17*, 115-138.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books.  
(ボウルビィ J. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子(訳) 母子関係の理論 I 愛着行動 1976 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1988). *A secure base*. London: Routledge.  
(ボウルビィ J. 二木武(監訳) 母と子のアタッチメント—心の安全基地— 1993 医歯薬出版株式会社)
- 遠藤利彦(1992). 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観— *心理学評論*, *35*, 201-233.
- Furman, W. & Buhrmester, D. (1985). Children's perceptions of the personal relationships in their social networks. *Developmental Psychology*, *21*, 1016-1024.
- Hartup, W.W. (1989). Social relationships and their developmental significance. *American Psychology*, *44*, 120-126.
- Hazan, C. & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships. Vol.5: Attachment process in adulthood*. London: Jessica Kingsley. pp.151-178.
- 久田 満(1987). ソーシャルサポート研究の動向と今後の課題 *看護研究*, *20*, 170-179.
- 本多潤子(2002). 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成 *カウンセリング研究*, *35*, 246-255.
- 本多潤子・桜井茂男(2002). 児童の家族画を用いた「母親との愛着」の測定 *筑波大学心理学研究*, *24*, 203-210.
- 井上まり子・高橋恵子(2000). 小学生の対人関係の類型と適応—絵画愛情関係テスト(PART)による検討— *教育心理学研究*, *48*, 75-84.
- Kahn, R.L. & Antonucci, T.C. (1980). Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In P.B. Baltes & O.G. Brim (Eds.), *Life span development and behavior. Vol.3*. San Diego CA: Academic Press. pp.253-286.
- 粕谷貴志・河村茂雄(2005). 中学生の内的作業モデル把握の試み—尺度の信頼性・妥当性の検討— *カウンセリング研究*, *38*, 141-148.
- 加藤隆勝(1984). 思春期の人間関係 大日本図書
- 数井みゆき(2007). 子ども虐待とアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦(編著) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 pp.79-101.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亚希子・坂上裕子・菅沼真樹(2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 *教育心理学研究*, *48*, 323-332.
- 久保田まり(1995). アタッチメントの研究 川島書店
- Levitt, M.J. (2001). *Social networks and social adaptation in middle childhood and early adolescence*. Final report to The Spencer Foundation.
- Levitt, M.J., Bustos, G.L., Crooks, N.A., Hodgetts, J., Milevsky, A. & Levitt, J.L. (2002). *Multiple attachments and well-being in middle childhood and adolescence*. Presented at the meeting of the American Psychological Association, Chicago.
- Levitt, M.J., Guacci-Franco, N. & Levitt, J.L. (1993). Convoys of social support in childhood and early adolescence: Structure and function. *Developmental Psychology*, *29*, 811-818.
- 森 和代・堀野 緑(1992). 児童のソーシャルサポートに関する一研究 *教育心理学研究*, *40*, 402-410.
- 村上達也(2010). 児童期におけるアタッチメントの内的作業モデルの構造 筑波大学大学院人間総合科学研究科修士論文(未公開).
- 村上達也・桜井茂男(2010). 児童期のアタッチメント対象の把握—Function Based アプローチによる検討— *筑波大学心理学研究*, *40*, 51-59.
- 中尾達馬・加藤和生(2004). 成人愛着スタイル尺

- 度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, **75**, 154-159.
- Parker, J.G. & Asher, S.R. (1993). Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Developmental Psychology*, **29**, 611-621.
- Rubin, K.H., Bukowski, W. & Parker, J.G. (1998). Peer interactions, relationships, and groups. In N. Eisenberg (Volume Ed.), *Handbook of Child Psychology Vol.3: Social, emotional and personality development*. New York: John Wiley. pp.619-700.
- 坂上裕子 (2005). アタッチメントの発達を支える内的作業モデル 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 pp.32-48.
- 佐藤朗子 (1993). 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), **40**, 215-226.
- 嶋田美由紀・田中雄三 (2005). 青年期の対人関係が内的作業モデルの変化におよぼす影響 鳴門生徒指導研究, **15**, 16-29.
- 清水由紀 (2009). 児童期②: 友人とのかかわりと社会性の発達 藤村宣之 (編著) 発達心理学—周りの世界とかかわりながら人はいかに育つか— ミネルヴァ書房 pp.108-124.
- Slavin, L.A. & Rainer, K.L. (1990). Gender differences in emotional support and depressive symptoms among adolescents: A prospective analysis. *American Journal of Community Psychology*, **18**, 407-421.
- 園田菜摘・北村琴美・遠藤利彦 (2005). 乳幼児期・児童期におけるアタッチメントの広がり と連続性 数井みゆき・遠藤利彦 (編著) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 pp.80-113.
- Sullivan, H.S. (1953). *Conceptions of modern psychiatry*. New York: W.W. Norton.  
(サリヴァン H.S. 中井久夫・山口隆 (訳) 1976 現代精神医学の概念 みすず書房)
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 山岸明子 (1997). 青年後期から成人期初期の内的作業モデル—縦断的研究— 発達心理学研究, **8**, 206-217.

(受稿 3 月 23 日 : 受理 4 月 30 日)